

# 美術科教育学会通信

No.88 2015.2.20

- 巻頭言；第37回美術科教育学会上越大会の盛会と実り多き〈学会・協同体〉形成に思いを馳せて
- 第37回上越大会最終案内  研究ノート（授業研究部会より 他）  新刊紹介
- 本部事務局より

## 巻頭言

# 第37回美術科教育学会上越大会の盛会と実り多き〈学会・協同体〉形成に思いを馳せて

副代表理事（総務担当） 宇田秀士（奈良教育大学）

### 第37回美術科教育学会上越大会を目前にして

学会上越大会が目前に迫ってきました。昭和61(1986)年3月以来、29年ぶりの開催となります。私自身の学会初参加がこのときでしたので、熊本先生や大橋先生などのお話、当時の博士課程院生のCT スキャンを用いた斬新な発表、雪の中での全体集合写真撮影など今でも鮮明に覚えています。

今大会は、西村先生、松本先生を中心に進められています、副学長や連合大学院博士課程のお仕事をこなしながらの激務となっています。1年前の自身の奈良大会運営のことを思い出しても、これら運営事務局の皆様の労に報いることができるのは、多くの参加者と熱のこもった発表や議論のみだと思います。年1回の大会の場、後のページにある大会案内を道標に是非とも上越の地に集いましょう。

### 学会の絆づくり - 「オンライン名簿」を活かして

通信87号でお知らせ致しましたように、本学会では名簿を3年毎に発行してきました。支局（ガリレオ社）開設に伴い、9月の理事会で検討した結果、これまでの冊子（印刷物）形式の名簿を廃止し、今後は会員がHPからパスワード入力により会員の連絡先や研究分野などを検索できる「オンライン名簿」とすることに致しました。現在は、試行的に稼働しており、本部事務局メンバー内で試験運用中です。



オンライン名簿の検索画面

上記は、その検索ページですが、専門分野D群とキーワードの2つの項目にチェックを入れ、キーワードの欄には、「造形遊び」と入力しています。この条件で検索すると、私と丁子先生（和大）の2名の名が出てきました。このような検索は、研究の仲間づくりや意見交換をするときに役立つと思われます。

## 「オンライン名簿」整備の具体的な作業

この通信と一緒に支局(ガリレオ社)からの案内が同封されていますが、これもよくお読み下さい。この通信が会員に届いてから1週間程度あけ、3月からこの名簿の本格稼働を予定しています。学会HP<http://www.artedu.jp>の中にオンライン名簿の窓口バーがつくれますので、それをクリックして名簿にお入り下さい。

意見交換が活発で相互に高めあうことのできる<学会・協同体>形成に向けては、この「オンライン名簿」も鍵を握ると考えています。公開項目は、もちろん各会員が決定できるのですが、会員相互の交流のために、所属先住所、メールアドレスなど可能な範囲での公開を個人的には願っています。「研究プロジェクトメンバーや研究討議パネラーにお誘いしたい」と思っても連絡先がなければ前に進まないからです。

また、あわせて、研究部会や専門分野の登録もお願い致します。こちらも公開していただくことにより、同じ関心を持つ研究・実践のチーム結成につながり、研究活動の活性化になると期待されます。

現在、試験運用中の会員の名簿を見ますと、意図的に非公開としているというよりも、手つかずになっている状態の方が多く感じています。例えば、各研究部会の所属人数を見ますと、授業研究28人、美術教育史14人、工作・工芸8人、アートセラピー3人、現代<A/E>16人、乳・幼児造形17人、高校美術7人、インクルーシブ6人となっています。各研究部会には複数登録可能であることや昨年3月の各部会の発表会場の様子を見ると、実数はもう少しあると思われます。各研究部会の代表者の皆様、登録をお呼びかけ下さい。

各会員は、会員番号(会員ID)、パスワードを入力して各会員のページを開き、各自の登録内容を確認し、必要があれば修正して下さい。

### 一斉配信メールについて

美術科教育学会<一斉配信メール>は、発行時期の関係で年3回の学会通信(紙媒体、6月、10月、2月発行予定)ではカバーできない案内をお伝えしていきます。これまで、11月と12月の2回、配信しました。次回配信は、上越大会の直前情報を中心に3月10-15日頃の配信予定です。これまでの2度の配信が届いていない場合には、支局に問い合わせ下さい。

一斉配信メールは、状況に合わせて柔軟に配信するため、固定

的な日程ではありませんが、12月、3月、5月、7月頃を予定しています。このメールも経費が発生するため年間4-5回の見込みです。各会員で、発信内容がある場合には、ウェブ担当上山先生又は守田に連絡ください。なお発信内容は、原則として学会が関わる3月の年次大会、リサーチフォーラム、地区会、研究部会の行事、連携協定を結んでいる関連学会の行事、本学会が加盟している教育関連学会連絡協議会や芸術学関連学会連合の行事などを想定しています。これら配信の趣旨と外れる場合には、掲載をお断りする場合がありますことをご承知おき下さい。

具体的には、まず学会HPにPDF案内を掲載し、そこにリンクするような形での記事となります。PDFとHP上の見出しは、各自で作成となりますので、HPの地区会・リサーチフォーラムのページなどを参照下さい。

### 秋の理事選挙に向けて

今年秋には次の3年間の体制を担う学会理事選挙がありますが、これも9月の理事会で審議し、支局(ガリレオ社)の開発したシステムを利用したオンライン選挙の予定です。各会員は、HP上からアクセスし、被選挙者名簿から電子投票しますが、システム上で暗号処理をすることにより匿名性が確保されます。このシステムは支局がサポートする他の学会や協会での役員選挙で既に使われています。

選挙権者名簿、被選挙者名簿の整備などを今後進めていきますので、各会員情報の登録をお願い致します。

### 熱のある<学会・協同体>形成に向けて

現在、外部委託会社に一部業務をお任せする金銭的な余裕が出てきたのは、先達の「手弁当」の尽力があつてのことです。理事会やシンポジウムなどの運営は、ほぼ自前の時代が長く続きました。この時代があつてこそ今の学会であることを肝に銘じておきたいと思います。

また、草創期の形が定まらない会の姿、試行錯誤のイベント、口角泡を飛ばす議論などが面白かったというお声も度々頂戴致します。先達に負けずに、我々も是非様々な立場からの議論をしていきましょう。それではまた、上越で。

# 第37回美術科教育学会 上越大会 最終案内

上越大会実行委員長 西村俊夫(上越教育大学)



## 【上越大会の概要】

■主催：美術科教育学会

■会期：2015年3月28日(土)、29日(日)

■会場：上越教育大学(上越市山屋敷町1番地)

### ■大会テーマ

子どもを見ることから始まる美術教育への回帰

### ■日程(予定)

3月27日(金) 理事会等

13:30～15:30 学会誌編集委員会

15:40～18:00 理事会(理事、監事)

3月28日(土) 大会第1日

9:00～9:30 受付

9:30～11:45 研究発表I

12:25～13:20 開会行事・総会 於:講301

13:20～15:00 研究発表II

15:10～18:00 シンポジウム 於:講301

「子どもを見ることから始まる  
美術教育への回帰」

18:10～20:40 懇親会 於:大会会館

3月29日(日) 大会第2日

9:00～11:50 研究発表III

13:00～14:00 研究部会交流会I

14:10～15:10 研究部会交流会II

### ■シンポジウムについて

新聞やテレビでは、子どもが被害者になり、加害者になる様々なニュースに出会います。どうしたら人の視点や気持ちに立つことができるのか。また、どうしたら自分が成り立ち、同時に、他者と世界を共感的に生きることが成り立つのか。わたしたちの表現や言葉が生まれる必然として、他の〈わたし〉としての他者がいます。この他者との働きかけをとおして、人としての〈わたし〉の声と行為が生まれ、他者の声や行為とつながることで成り立っています。

発達心理学者の浜田寿美男氏は「子どもは身体をもってこの世に生まれ別の身体をもった他者との間で見る見られる、手を握る・握られる、抱く・抱かれる、声をかける・かけられる……と、さまざまな回路を介して能動-受動のやりとりを交わす。〈わたし〉という心的構図が生み出されていくのは、この条件のもとでのことである。(中略) こうして生まれる〈わたし〉は、必然的な契機として他者の〈わたし〉を含み込んでいる。個別的でありながら、同時に共同的でもあるというこの条件を、子どもはその自然として、最初からその身体に組み込んでいる」とします。そして、

「目に見え、声に聞こえ、手に触れることができる他者の身体に囲まれて、そこからの能動の発散を我が身に受動する。その受動の嵐のなかで、そこから逆に照らし出されるようにして私の〈わたし〉は生まれる」とし、「他者の〈わたし〉が成り立つことによって、はじめて私の〈わたし〉が成り立つという順路が、(中略)少なくとも必須の一側面としてある」。(『子ども学序説』岩波書店、2009、14・38頁)と述べています。

子どもたちの造形的な表現や鑑賞の過程においても、他者や身の回りの世界と「ともに生きるかたち」を、どのように作り新たな生を成り立たせていくのかという問いを離れて、生きて働く行為やまなざしの成立は困難といえます。その過程に「私の〈わたし〉が成り立つ順路」が示唆を与えています。子どもを見ることから始まる「ともに生きるかたち」の創造としての美術教育について、会場の皆様のご意見を交えて議論を深めて参ります。

### シンポジスト:

・浜田 寿美男氏

(奈良女子大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授)

京都大学大学院文学研究科博士課程。花園大学教授、奈良女子大学教授を経て現職。著書に『私のなかの他者』(金子書房、1998年)、『私』とは何か』(講談社、1999年)、『自白の心理学』(岩波書店、2001年)、『自白の研究』(北大路書房、2005年)、『子ども学序説』(岩波書店、2009年)、『障害と子どもたちの生きるかたち』(岩波書店、2009年)、他多数。

・鈴木 陽子氏(目黒区立五本木小学校)

・横内 克之氏(新宿区立落合第六小学校)

子どもたちと図工をこよなく愛する熟達した図工の先生であるお二人から、子どもたちの生きる行為や表現にひたむきに会いながら、図工の時間とご自身を深めてこられたこれまでの出来事や画像をご紹介いただき、子どもを見ることから始まる美術教育へ回帰することの意味と可能性について、深めて参りたく存じます。

・司会：松本 健義(上越教育大学)

### ■参加申し込み方法

(1) 学会参加費:

① 事前申込み料金

正会員:4,500円、大学院生(社会人をのぞく、正会員を含む)

以下同様)：2,500円、大学院生以外の非会員：5,500円

② 当日申込み料金

正会員：5,000円、大学院生：3,000円、大学院生以外の非会員：6,000円

※大学美術教育学会会員、日本美術教育学会会員の方も、本学会会員扱いとなり、正会員料金で参加できます。払込用紙通信欄にご記入ください。

懇親会費：

① 事前申込み料金

3,500円(社会人を除く大学院生は、2,500円)

② 当日申込み料金

4,000円(社会人を除く大学院生は、3,000円)

(2) 参加申し込み最終期限と参加費・懇親会費の払込み

最終期限：2015年2月27日(金)

★参加申し込み及び参加費の払込みは、学会通信に同封の払込取扱票にてお振り込みください。参加費振込により学会参加申し込み手続きとなります。

★払込取扱票は、郵便局窓口の払込取扱票をお使いください。通信欄に「参加費 4,500円」「懇親会費 3,500円」等の振込内容と金額を明記してください。

口座番号記号： 00510-4-101893

加入者名： 第37回美術科教育学会上越大会

★通信欄に、住所、所属(大学院生の場合は、「院生」と明記)、氏名、電話番号等をご記入ください。

★当日受付も可能ですが、大会運営上できるだけ事前申込みをお願いします。なお、参加申し込み最終期限の2月27日(金)以降は口座振込せず、当日受付で当日料金にてお支払いください。

■研究発表概要集原簿締切と研究発表プログラム

2015年2月27日(金)までに大会事務局発表概要受付アドレス [37artedu@juen.ac.jp](mailto:37artedu@juen.ac.jp) へ、ワードファイルとPDAファイルを添付してお送りください。

研究発表プログラムをご確認いただき誤字脱字等ございましたら、上記アドレスへ件名「研究発表プログラム」で、2月27日(金)までに、メールでお知らせください。

■研究部会発表

研究部会での発表概要は、2015年2月27日(金)までに、[37artedu@juen.ac.jp](mailto:37artedu@juen.ac.jp) へ、件名「研究部会発表」で添付ファイルにてお送りください。

問い合わせ先：大会運営事務局 〒943-8512 上越市山屋敷町1番地 上越教育大学

西村 俊夫(大会実行委員長) TEL/FAX 025-521-3536(研究室直通) 025-521-3204(副学長室)  
E-mail nisimura@juen.ac.jp

松本 健義(研究発表担当) TEL/FAX 025-521-3346(研究室直通) E-mail takeyosi@juen.ac.jp

阿部 靖子(参加費等担当) TEL/FAX 025-521-3546(研究室直通) E-mail yasuko@juen.ac.jp

高石 次郎 TEL/FAX 025-521-3537(研究室直通) E-mail takaishi@juen.ac.jp

五十嵐 史帆 TEL/FAX 025-521-3560(研究室直通) E-mail shiho@juen.ac.jp

■情報発信コーナー

学会での資料配布、展示、販売等につきましては、[37artedu@juen.ac.jp](mailto:37artedu@juen.ac.jp) へ、件名「情報発信」で添付ファイルにてお送りください。配布物を大会事務局へ事前に送られる場合は、3月18日(水)以降に届くよう「第37回美術科教育学会上越大会事務局松本健義」宛て下記住所にて送付してください。

■学会webサイト上でのお知らせ

上越大会開催までの各種の広報・連絡等は、美術科教育学会webサイト(<http://www.artedu.jp/>)にて随時お知らせします。ご参照ください。2015年3月14日北陸新幹線開通に伴う、新幹線上越妙高駅から高田方面への列車ダイヤは、学会ホームページでお知らせいたします。

■上越教育大学までの移動手段

◆主要駅からJR新幹線上越妙高駅まで

東京から 1時間48分(北陸新幹線)

大阪から 3時間22分(北陸線、北陸新幹線)

※新幹線上越妙高駅より上越教育大学：タクシー15分。

◆新潟空港より高田駅または直江津駅まで

空港リムジンバスにて新潟駅へ。JR信越線で新潟駅より直江津駅または高田駅まで所要時間約2時間。新潟駅前バスターミナルより高速バス高田行で高田駅前まで所要時間約2時間。他に「新潟空港直行ライナー」(ジャンボタクシー：要予約)があります。

◆直江津駅より上越教育大学まで

○頸城バス：直江津駅北口バス停より、路線番号5「教育大学線」に乗車し「教育大学」下車。または、路線番号36「山麓線」乗車「教育大学東」下車。どちらも所要時間20分。バス停より徒歩5分。

○タクシー：所要時間約10分。

◆高田駅より

○頸城バス：高田駅近くの「本町6丁目」バス停より路線番号5教育大学線乗車。「教育大学」下車。所要時間20分。徒歩5分。

○タクシー：所要時間約10分。

■宿泊について

ホテルは、高田駅周辺と直江津駅周辺にあります。新幹線上越妙高駅周辺にはありません。ホテルから上越教育大学への移動は、頸城バス、タクシー等をご利用ください。

9:00~9:30 受付

研究発表 I

	A会場(講201)	B会場(講302)	C会場(人104)	D会場(人105)	E会場(人106)	F会場(人204)	G会場(人205)	H会場(人206)
9:30 ~ 10:00	コラボレーション造形実践の課題可能性-未知なる二者で奏でる「デュエット」の取り組みから-	図画工作の授業における共感性の育成	[絵画・以降]の時代に構想する抽象絵画教育-P・モンドリアンとE・ケリーをめぐって-	造形表現行為が育つる学びの可能性について	中学校美術科における題材設定に関する一考察-自らの鑑賞授業の実践を通して-	フィンランドの実態から考える我が国のものづくり教育の課題	造形教育における(つくること)-「発達」と「生成」	スペイン・マドリッドにおける鑑賞プロジェクト-ソロヤの作品を使った幼児対象の実践を通して-
	名取 初穂(国学院大学栃木短期大学/宇都宮大学大学院) 大杉 健(東京都府中市若松小学校)	伊藤 龍豪(川崎市立南生田小学校・横浜国立大学大学院)	永守 基樹(和歌山大学)	渡辺 美由紀(上越教育大学大学院) 松本 健義(上越教育大学大学院)	大野 ますみ(上越教育大学大学院)	三根 和浪(広島大学大学院)	星野 郁馬(上越教育大学大学院)	PASTOR MATAMOROS・SOFIA(富山大学大学院)
10:05 ~ 10:35	アートワークショップを通じた「出会い」から「理解」へ-保育園児と特別支援学校生徒の交流事例から-	生きる力を育む色彩造形活動の視点	[絵画・以降]の時代におけるモンドリアンの図画工作科題材化-色面とドロイング-	第36回美術科教育学会 奈良大会プレ学会(2013. 12. 21)報告-テーマ:美術教育における「遊び」概念と指導-	図画工作・美術への[苦手意識]の研究II-目指すべき造形美術教育を実現するための-	次世代のものづくり教育構想におけるフィンランドのものづくり教育の意義-ものづくりの「責任」の問題を中心として-	エアロロッキー-ロッキー指導の一助-	静物画の源流的様式の統一的鑑賞-「フレ静物画」を学ぶ可能性の検討-
	池亀 直子(秋田公立美術大学) 北島 珠水(秋田県立栗田養護学校)	葉山 登(横浜創英大学)	湯川 雅紀(智弁学園和歌山小学校) 西井 恵美子(和歌山市立碓浜小学校)	宇田 秀士(奈良教育大学)	降旗 孝(山形大学)	佐藤 昌彦(北海道教育大学)	中川 知子(茨城県つくば市立豊里中学校)	岡田 匡史(信州大学)
10:40 ~ 11:10	「わたし」が解き放たれる美術表現-障害のある人の表現活動に関する実践的研究-	こどもの集団的な造形活動における技能の伝達過程に関する研究③	[絵画・以降]の時代におけるモンドリアンの抽象画の題材化	大田耕士の教育観-紙はんがの誕生とその変遷-	地域連携からみる中学校美術教育の歴史の変遷-学習指導要領を通しての考察-	フィンランドの美術・工芸系教育と教育実習について	多校種にわたるデカルコマニー実践の試み②-小学生と中学生の描画行為の比較-	アール・ブリュットの展覧会から見る美術上の意識の変化
	安藤郁子(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所, 秋田公立美術大学) 高石次郎(上越教育大学大学院)	武田 信吾(鳥取大学)	保富 仁之(和歌山県立田辺高等学校) 南 洋平(県立粉河高等学校)	中條 秀憲(東京家政大学大学院)	志藤 浩仁(新潟市立赤塚中学校)	尾澤 勇(秋田公立美術大学)	萩原至道(富山大学人間発達科学部附属中学校) 隅坂・上山輝(若山育代「富山大学」) 数みどり「江田希(同附属小学校)・米崎瑛美・林智子(同附属幼稚園)	新井 馨(大阪教育大学大学院)
11:15 ~ 11:45	芸術と(他者)	児童のアート空間把握-中学年の造形遊びを通して-	[絵画・以降]の時代における「スタイル」絵画の高校美術科題材化	長野の美術教育と石井龍三-石井龍三関係資料の整理を通して-	国際バカロラ中等課程プログラム改訂について②	「アーキビスト」考-フィンランドの「アーツ・アンド・クラフツ」教育を視て-	図画工作科の題材観について	小中学校を対象とした鑑賞プログラムにおける美術の捉え方の検討
	佐藤 哲夫(新潟大学)	蝦名 敦子(弘前大学)	南 洋平(和歌山県立粉河高等学校) 保富 仁之(和歌山県立田辺高等学校)	大島 賢一(信州大学)	小池 研二(横浜国立大学)	宮脇 理(インディペンデント・スカラー, 元・筑波大学), 尾澤 勇(秋田公立美術大学), 佐藤 昌彦(北海道教育大学)	山下 暎子	神野 真吾(千葉大学) 山中 悠(千葉大学)

11:45~12:25 昼休み

12:25~13:20 開会行事・総会 講:301

研究発表 II

	A会場(講201)	B会場(講302)	C会場(人104)	D会場(人105)	E会場(人106)	F会場(人204)	G会場(人205)	H会場(人206)
13:20 ~ 13:50	「子ども参加型評価活動」の可能性-評価材の選択と提出を促す事例から-	子どもの絵における空間表現の発達と指導②-食卓の奥はなぜ長い?-	美術教育におけるCLILのアプローチによる指導法の研究-熊本市立一新小学校での実践から-	子どもの考える力、表現する力、自己肯定感を育むための鑑賞活動の試み	アジアにおける美術教育の系譜-西洋美術の受容と独自性-	図画工作科教育法におけるリアリティについて-子どもたちの姿が見える授業づくり-	21世紀中期の「学校教育課題」と美術科教科書に関する考察	「子どものデザイン」からみえてくるもの
	立川 泰史(東京福祉大学)	阿部 宏行(北海道教育大学)	藤井 康子(大分大学) 東 奈美子(熊本市立一新小学校)	青木 善治(新潟県立近代美術館)	佐々木 幸(北海道教育大学)	笹原 浩仁(福岡教育大学)	山口 吾雄(宇都宮大学)	大泉 義一(造形教育センター 横浜国立大学) 伊藤 龍豪(造形教育センター, 川崎市立南生田小学校)
13:55 ~ 14:25	「子どもの(見る)を探って-低学年における図工実践事例の考察-	オーラル・ヒストリーによる戦後の創造主義的造形教育の検証と考察①	表現を体験する学びから表現を探し出す学びへ①-教員養成課程「図画工作」の授業改善の理論的背景とDVD「図工美術の実技ベシックス」-	ムンク作『叫び』における比較鑑賞論	美術科教育の政策と実践における「自由」概念の検討-新自由主義教育改革下での美術教育・学習の機会保障問題との関わりから-	教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究-初任1年目の段階における実技教科指導の実態-	美術科・図画工作科における3DCG表現の技術指導と協同学習	Digital Contentsを活用した鑑賞教育の構想
	井ノ口 和子(武蔵野市立本宿小学校)	辻 政博(帝京大学)	佐藤 賢司(大阪教育大学) 須増 啓之(大阪教育大学)	立原 慶一(宮城教育大学)	藤原 智也(愛知県立大学)	隅 敦(富山大学)	上山 浩(三重大学)	安東 恭一郎(代表)(香川大学)
14:30 ~ 15:00	「子どもの絵を見ること」について	造形遊びの興亡と「美育文化」	表現を体験する学びから表現を探し出す学びへ①-教員養成課程「図画工作」におけるDVD「図画美術の実技ベシックス」活用成果と課題-	鑑賞教育の基礎的考察-鑑賞教育の目的は鑑賞か、そして「絵を聴く」という比喩など-	EUI公教育における芸術・文化教育の指針について	教員養成の高度専門化に向けた美術教育カリキュラム(2)	「映像メディアによる表現」を力-震災後PTSDからPTGへ-	美的感性と科学的思考力を育成する教材開発
	宮坂 元裕(無所属・横浜国立大学名誉教授)	穴澤 秀隆(NPO法人市民の芸術活動推進委員会)	須増 啓之(大阪教育大学) 佐藤 賢司(大阪教育大学)	金子 一夫(茨城大学)	結城 孝雄(東京家政大学)	新開伸也(滋賀大学)	柳沼 宏寿(新潟大学) 宮脇 理(インディペンデント・スカラー, 元・筑波大学)	安東 恭一郎(代表)(香川大学)

15:10~18:00 シンポジウム「子どもを見ることからはじまる美術教育への回帰」(講301)

18:10~20:40 懇親会(大会館)

研究発表Ⅲ

	A会場(講201)	B会場(講302)	C会場(人104)	D会場(人105)	E会場(人106)	F会場(人204)	G会場(人205)	H会場(人206)
9:35 ~ 10:05	美術科授業における導入方法の検討 山本 果林(広島大学大学院) 三根 和浪(広島大学大学院)	美術科における言語活動の充実に関する一考察—かわり合いの中で、創造活動に自信がもてる生徒の育成をめざして— 牛山 晴登(刈谷市立刈谷南中学校)	(世界)とかわる(私)の生成過程—造形遊びの記述分析による一考察— 横田 翼(上越教育大学大学院) 本 健義(上越教育大学大学院)	CG制作における模倣と創造 浅野 恵治(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)	小学校の朝活動における描画(スケッチ)に関する研究Ⅰ 八桁 健(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)、萩生田 伸子(埼玉大学大学院)、荒田 真弥(埼玉大学大学院)、有原 穂波(埼玉大学大学院)	スペインと日本の初等美術教育の比較②—工作指導に関わる題材の分析を中心として— 網谷 夏実(富山大学大学院)	重度・重複障害児の造形活動における授業改善の方策 池田 吏志(広島大学)	なぜ青年期に対する美術館のアプローチが難しいのか?—美術が「疾風怒濤の時代」に果たす役割からの考察— 田中 千秋(北海道教育大学大学院教育学研究科美術教育専修美術理論・美術史分野)
10:10 ~ 10:40	展示スタイルを考えての新しい日本画制作—展示を見通した制作のプロセス— 松原 秀伸(神奈川県立弥栄高等学校)	図画工作科における英語活動Ⅱ 樋口和美(福岡教育大学附属福岡中学校)	粘土の造形活動における幼児の見せる発話Ⅰ—発話の状況とその機能に着目して— 芦田 風馬(奈良教育大学) 竹内 晋平(奈良教育大学)	映画の製作を授業化するために 長谷 海平(一橋大学)	小学校の朝活動における描画(スケッチ)に関する研究Ⅱ 萩生田 伸子(埼玉大学大学院)、八桁 健(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)、荒田 真弥(埼玉大学大学院)、有原 穂波(埼玉大学大学院)	中等教育における工作教育の歴史的検討と比較—ヨーロッパのデュアルシステムから— 齊藤 暁子(名古屋大学大学院)	造形活動における知的障害児の言語・非言語コミュニケーションの事例分析 森 芸恵(筑波大学附属大塚特別支援学校、筑波大学大学院人間総合科学研究科)	題材ループリックの協同的な開発過程に関する質的研究—中学生の美術鑑賞教育のパフォーマンス評価の試みを例に— 佐藤 絵里子(筑波大学大学院)
10:45 ~ 11:15	H. リードによるモダニズムは21世紀のデザイン教育論の礎石となり得るか? 山木 朝彦(鳴門教育大学) 宮脇 理(インディペンデント・スカラー、元筑波大学)	放課後子ども教育事業へのアート活動の導入に向けた枠組みの構築—茨城県水戸市のプログラム策定のプロセスの事例として— 市川 寛也(筑波大学芸術系)	乳幼児からの造形についての一考察 丁字 かおる(和歌山大学)	映画と芸術教育の接近—鑑賞授業の実践— 田中 幸子(東京都立総合芸術高等学校)	ドローイングの判別に関する研究Ⅰ 荒田 真弥(埼玉大学大学院)、萩生田 伸子(埼玉大学大学院)、八桁 健(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)、有原 穂波(埼玉大学大学院)	イスラム世界の初等教育課程における美術教育の実態—モルディブ共和国での現地調査から— 箕輪 佳奈恵(筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻)	インクルーシブ教育の考えを基にした図工美術教育における映像メディア表現の実証的研究 鈴木 紗代(館林市立第十小学校)	所蔵作品を用いた米・豪の鑑賞教育事情—コレクションの効果的展開をめざす教育普及活動の実践— 一條 彰子(東京国立近代美術館) 寺島 洋子(国立西洋美術館)
11:20 ~ 11:50	造形ワークショップにおける表現の広がりの可能性—非言語的造形活動場面で生まれる表現の変化— 佐竹 誠(和歌山大学大学院)	自己効力感を育む造形活動のあり様についての一考察 三銘 史織(上越教育大学大学院)	日本美術の教養形成媒体の考察 有田 洋子(島根大学)	思春期における描画の危機の研究—その原因と指導のあり方— 平星 允彬(横浜国立大学大学院)	中華人民共和国における美術教員養成課程 徐 英杰(筑波大学大学院博士後期課程)	自閉症児支援の「欠陥モデル」から「成長モデル」への転換—多重知能理論による描画とシンボル・システムからの検討— 細野 泰久(岩手県立宮古恵風支援学校)	国立美術館・博物館の所蔵作品を用いた鑑賞教育の展開—発達段階・学習指導要領を踏まえた「美術鑑賞キーワードmap」— 一條 彰子(東京国立近代美術館) 奥村 高明(成徳大学)	
11:50~13:00 昼休み								

	A会場(講201)	B会場(講302)	C会場(人104)	D会場(人105)	E会場(人106)	F会場(人204)	G会場(人205)	H会場(人206)
13:00 ~ 14:00	美術教育史研究部会 職後美術教育の継祖 金子 一夫(茨城大学)	工作・工芸領域部会 3Dプリンターが登場する時代の「ものづくり教育」 佐藤 昌彦(北海道教育大学)	インクルーシブ美術教育研究部会 ワークショップ「インクルーシブ社会/教育に美術教育はどのように関係/貢献できるのか—インクルーシブに活動・実践・思考の紹介と共有」 茂木 一司(群馬大学)	乳・幼児造形研究部会 「児童期につながる幼児の造形—基本理念と実践—」 丁子 かおる(和歌山大学)	授業研究部会 大泉 義一(横浜国立大学)	現代<A/E>部会 拡張された〈美術/教育〉の基本構造と可能性を考える 谷口幹也(九州女子大学)	アートセラピー研究部会 栗山 裕至(佐賀大学)	高校美術研究部会 上山 輝(富山大学)
14:10 ~ 15:10								

発表者の方へ

1. まれにノートパソコンとプロジェクタを正しく接続しても、プロジェクタ側でノートパソコンからの信号を検知しない(画像が投影されない)場合があります。このようトラブルを未然に防ぐため、休憩時間や会場が使用されていない時間帯等に、該当の会場にて接続テストを実施していただくことをお勧めいたします。  
※ お手持ちのパソコンの解像度・周波数等が高く設定されていることが上記トラブルの原因となる可能性があります。この場合は、「画面のリフレッシュレート」を低く設定することで解決する場合があります。  
※ 音声出力には対応しておりません。
2. 研究発表の進行は、次のように行います(時間厳守をお願いします)。  
一鈴:15分経過、二鈴:20分経過、三鈴:30分経過(質疑応答終了)

※ プログラムの内容については変更する場合があります。お気づきの点は 37artedu@juen.ac.jp へ件名「研究発表プログラム」でお知らせ下さい。

# 実践者による授業研究の視野をひらく手だてと特性

立川泰史 (東京福祉大学)

## 1 はじめに

授業研究部会では、図画工作科・美術科教育における「授業研究のすすめ方」に着目し、2007年度から議論を広げています。「なぜ今、授業研究が求められるのか」という問題意識は、「授業者自らが反省的実践を有意な研究ステージにまで高めること」の大切さと課題という視点から照らされたものです。具体的な授業研究の視点は、美術科教育における授業構造の特色、授業研究の歴史、授業研究の目的と方法、授業研究の実際、そして研究成果のまとめや公開に至るまでの方法と課題といったものです。このように多側面から授業研究を進める「海路」の可視化を試みる中、「研究データの収集」が、授業者の手による研究の難所になるという見解がこれまでの検討でも共通しています。本稿では、「授業研究におけるデータの収集方法と分析の特性」に絞り、いくつかのバリエーションを検討したいと思います。

## 2 データ収集の前提となる観察視野のマッピング

ここで想定する「授業研究」とは、授業者が題材活動を遂行しながら、その背景に抱く研究主題や問題意識を探究しようとする活動です。単なる実践研究なら、題材目標から設定された評価規準の達成度や課題の洗い出しから授業改善を試みる事ができます。ところが、先人の並々ならぬ研究成果に新たな可能性を提案していく研究となれば、授業改善より先に見え隠れする研究目標をもう一方の脇に抱え込むことになります。授業者は、実践の遂行と研究目的に見合ったデータ収集という両天秤をバランスよく担ぐ知見と体力が求められます。それが「データ収集が難所」とされる所以です。この難所で遭難しない羅針盤の一つが、従来から知られる「授業の構成要素」かもしれません(図1)。図1は、授業の構成要素の関係を示すラインを筆者の認識でラベリングし

たものです。こうした図は、改善の視点としても活用されますが、研究の目的に沿った観察視野を、授業文脈に位置づける案内図としても捉えられます。特定題材の改善を目標とする場合の多くは、教師の指導経験と子どもの創造経験が交わる場所(エリアa)で起こる事象を主な観察の視野にして、題材目標・教材環境・活動構成が省察されます。一方、改善より先を見据える教育研究が目的の場合は、授業に係る要素全体のダイナミズム(エリアb)が、観察対象になり得ると想定できます。それだけに、問題に沿う観察視野のマッピングがデータ収集の鍵になると思われます。しかし、題材というコンテンツの運営に捕らわれない俯瞰的視野をもつことは容易でなく、散在するデータ資源を掘り起こす方法もまた多岐に渡ります。そこで、データ収集の手法とタイミングが、難所攻略の「次なる手がかり」になります。

## 3 データ収集方法のバリエーション

では、データ収集の実際的な手法には、どのようなバリエーションが考えられるでしょうか。もちろん、それは研究の目的と内容から策定されます。が、この「難所」を険しくしているのは、「授業者自身が単独でデータの収集役を担う」という手際の問題です。協力者が得られるプロジェクト研究は別にして、妥当な考察データ収集を実行する手際のよさは、選択した方法の特性理解と経験から発揮されると言えるのではないのでしょうか。そこで、以下では、この手際問題を念頭におき、データの収集方法と特性を検討したいと思います。

### (1) 教育研究方法のタイプ

大きく分けて観察法・調査法・実験法の三種があります。

- ① 観察法: 観察対象について、できるだけ主観を加えず、正確に記述・分析をする方法。この方法では相関関係はわかりますが、因果関係を特定することはできません。
- ② 調査法: 多くの対象に「質問紙法」や「面接法」を実施し、得られたデータを統計的に処理し、一般的傾向を導き出す方法。
- ③ 実験法: 従属変数に影響を及ぼす別の要因をコントロールした上で、独立変数が従属変数に及ぼす効果を検討する方法。具体的には、ある処理を受ける「実験群」と、処理を受けない「統制群」に分けて比較実験を行います。

3つ目の「実験法」は、等質な授業を行う責任と研究倫理に添

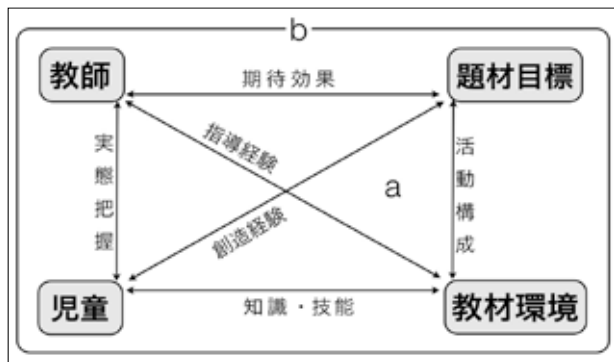


図1 授業構成要素の関係

う科学の両立を考えると採択に悩む場合もあります。

また、「観察法」と「調査法」を併用して「解釈的アプローチ」と呼んだり、研究の方法によって、「仮説生成型」と「仮説検証型」に分類したりすることもあります。本来、「仮説生成型」は「仮説検証型」の準備として用いられることが多かったかもしれませんが、近年では「仮説生成」という単独の研究意義が認められてきました。授業者の研究態度がどちらを起点にするかによって、データ収集方法の選択肢も変化する関係にあると言えます。

## (2) データ収集方法のバリエーションと特性

### ① エスノグラフィック・アプローチ

一般にエスノグラフィー (ethnography: 民族誌) は、人々の日常理解をありのままに記述し、当事者の視点から経験の意味を読み解く方法と言われます。20世紀初頭、ポーランドの人類学者マリノフスキー (B. Malinowski) がフィールドワークを研究方法の中心に位置づけて以来、人類学やアメリカのシカゴ学派と呼ばれる社会学を中心に発展した手法で、イギリスでは1960年代に解釈的アプローチの方法論として導入されました。日本では80年代にエスノグラフィーが子どもの社会化研究の手法として採用され、「教師-生徒間の交渉過程を詳細に記述する研究」と「学校の内部構造を社会の政治的・経済的な布置から説明する研究」に分かれて発展したようです。現在の教育分野では発達心理や状況的学習論などでも活用されているのは周知の通りです。手法としてのエスノグラフィーは、参与観察とインタビューを中心にし、調査法や文献収集を併用します。集団の中での実践や相互行為、あるいは人と道具との不可分な活動として捉え直した子どもの意味創出過程を観察し、解釈的に記述することが主要な方法となります。インタビューでは、調査者が研究の視点に沿った質問をある程度準備して臨む「半構造化インタビュー」が通常用いられます。例えば、エリカ・バーマン (E. Burman) は、調査者が完全に質問事項を決めて臨む「構造化」や、話者の文脈に委ねる「非構造化」のインタビュー方法は、応答間に隠れた知見を見過ごしたり研究視野をあやふやにしたりする危険性があると示唆しています。一方、柴山真琴によれば、フィールドワーカーとしての関与度には、「完全な参与 (complete participation)」から「参与せず (non-participation)」まで5段階の関与度合いがあるとされます。が、授業者自身が調査者の場合は「完全な参与」という立場以外をとることはむしろ不可能でしょう。そうであっても、フィールドノートを取ることに気配りが必要です。観察事実をテキストやイラスト・画像で記述するとき、調査者としての姿をどれだけ子どもに見せるかによって、活動のことが懸念されるからです。ビデオカメラの位置や色、メモ用紙の大きさについても周到な計画が求められます。通常、心理学的エスノグラフィーでは、「全体的観察期-焦点的観察期-選択的観察期」という段階を踏んで進みますが、授業者による調査の場合は、それを活動中瞬時に判断する必要があります。二度と繰り返されない活動とエピソードがあちこちで展開されるので、迷っていると

一連の文脈を見逃してしまうからです。その危機を救うのがビデオから取得できる画像と音声です。画像から子どもの姿勢や視線、身振りを観察し、発話・応答の文脈から行為の成り立ちを探ることもできます。

### ② 談話研究のアプローチ

談話を素材にした研究にはさまざまなアプローチがあり、背景になった学問領域によって、「談話分析」「会話分析」「インターアクション分析」「認知的エスノグラフィー」と呼ばれます。レビンソン (Levinson, S) は、狭義の談話分析は、言語学的な談話文法 (discourse grammar) を指し、会話分析 (conversational analysis) のような実証的な談話研究とは対照的だと指摘します。つまり、談話分析は、言語学を背景にして演繹的な考え方をとり、会話分析は相互行為の積み上げから一般的な規則性を帰納的に洗い出すものと言えます。後者の会話分析は、コミュニケーションの原理を解明する研究の一つで、1960年代から70年代、ガーフィンケル (H. Garfinkel) の「エスノメソドロジー (ethnomethodology: 人々の方法) 研究」に触発された社会学者のサククス (H. Saks) らによって提唱されました。発話を社会的行為として捉え、その意味を理由づける体系的な秩序を探ることを目的とします。このエスノメソドロジーを志向した会話分析とフィールドワークを結合させ、リアルタイムな記述から話し手と聴き手の相互行為を分析する認知科学がサッチマン (L. Suchman) やグッドウィン (C. Goodwin) らによって用意されました。注目した談話音声を文字化 (トランスクリプション) し、隣接する話者の交代 (ターン: turn-taking) や相互作用、非言語の身体配置なども含め、状況に埋め込まれた参加構造を解明していきます。人工物を取りまく人々の情意・意識・注意などの様相を情報処理過程と捉えながら、実技教科の内実を探る手法ですが、総合的なデータ収集が求められます。一方、教室を小さな社会と捉えると、学習の文脈 (context) によることばの変種 (使われ方) が課題になることもあります。ハリデー (M. A. K. Halliday) らロンドン学派が築いた選択体系機能言語学 (systematic functional linguistics) では、状況の違いによることばの使われ方、特にことばの使用域 (レジスター: register) と、その領域・趣意・様式を特定するジャンル (genre) に注目できます。こうした話しことばの比較や分類から集団や個人の特性を解き明かす言語研究に、コーパス言語学 (corpus linguistics) があります。実際に話されたり書かれたりしたことばから集積した言語資料をコンピュータソフトで統計的に分析します。このデータ分析では、前後の談話・連文の中で使われる語の用法や意味を読み解く質的な関心ばかりを対象としません。数量的なモデルからデータ間の差を検証したり、識別ルールを発見したりすることができます。データの相関分析やクラスター分析 (グルーピング)、データの対応関係から構造を散布図として可視化するコレスポネンス分析などが可能になります。統計的な基礎知識が必要ですが、集積した言語資料の分析に有効な手法です。



### ③ グランデッド・セオリー・アプローチ

グランデッド・セオリー・アプローチは、1960年代にアンセルム・ストラウス(A.Strauss)とバーニー・グレイザー(B.Glaser)らが発案しましたが、現在では幾つかの改訂バージョンも考案されています。この質的研究方法は、データに基づいて(grounded)分析を進め、データを表象する概念を抽出します。データ収集とデータ分析を繰り返すのが特徴で、複数の概念(カテゴリー)同士を体系的に関係づけた枠組みを理論として生成します。ここで言うデータとは、インタビューや参与観察で得られたものを指しますが、あらかじめ自分が持っているテーマや関心に沿った分析を行うのではなく、偏見を排したデータの読み込みから現象を構成しているものを探り出すというものです。データを収集したらテキストに変換し、カテゴリー関連図を作成するところまで分析を進めて次にどのような対象に向けてデータ収集を行なうのかを決めるという手順をとります。こうした「理論的サンプリング」と呼ばれる作業を、概念同士の関係を適切につかむ「理論的飽和」に至るまで続けることが求められるために、データも膨大になります。濃厚なデータの収集にあたる技能と感性、データの管理や概念カテゴリーの扱いにもある程度の訓練が必要だと言われます。何より、分析の方向を見据えながら、一方ではデータと距離をとった客観的な解釈を行なうことに注意をはらわなくてはなりません。つい文脈に捕らわれがちな私たちがデータと距離を置くために、データを切片化し、事例と冷静に向き合うために比較と問い立てを試みます。この比較や問い立てのツール(視点)となるのが「プロパティ(property)」と「ディメンション(dimension)」です。対象の特徴や属性がプロパティなら、それに関する幾つかの次元のパターンがディメンションということになります。これらの視点は、生データの塊を概念に置き換えてカテゴリーを抽出する際、データのラベリングを容易にするという役割も持っています。ときに、話し手のことばそのまま(in vivo code)が概念の内容を表すラベルにふさわしい場合があるので、少なくともICレコーダー等の適切な道具でデータを収集し、文字化することが必要です。

### ④ ナラティブ・アプローチ

1990年代から発展したナラティブ(narrative:物語・語り)研究は、多面的な現代思想の歴史を源流にもちます。日本では、ナラティブ・アプローチというカウンセリングの分野、つまり病理への対応や学校でのキャリア支援を想起されることが多いかもしれません。しかし、教科学習における「経験の語り」を重んじるという研究態度に立つと、授業研究にも新しい基礎を与えてくれると捉えられます。やまだようこによれば、「ナラティブとは、広義の言語によって語る行為と語られたもの」を指し、「広義の言語には、映像、身体、建築、芸術、パフォーマンス、都市など、記号化されたものすべてが含まれる」とされます。こうした広義な言語で語られたものや書かれたものを織物のように相互の関係性で成立するテキストと捉えます。

先に多面的な現代思想の源流と述べたものには、3つの潮流があります。一つ目は、オースティン(J.L. Austin)の「言語行為論」やヴィトゲンシュタイン(L. Wittgenstein)の「言語ゲーム」のように、言語が現実場面でどのように機能するかに注目する見方です。二つ目は、テキストは他のテキストと相互関連し引用モザイクとして構成され、相互に転移・置換を促す意味産出装置であるというクリステヴァ(J. Kristeva)の「間テキスト性」、またはテキストが現前の主体である作者の所有物ではなく、そこからすりぬけて移動していくとするデリダ(J. Derrida)の「エクリチュール論」などといった「作品・テキスト」の捉え直しです。三つ目は、時間構造の中で有機的に組織される物語としての歴史観を示したダント(A.C. Danto)やその影響を受けたリクール(P. Ricoeur)の「物語論」、あるいは人々が「人生」をどのように語り構成するのかを調べたマクアダムス(D.P. McAdams)らの「ライフ・ストーリー研究」などです。まず、ナラティブ研究でのデータ収集には従来の心理学モデルと異なる人間観が基盤となります。研究対象になるのは、「人間の内側にあるとされる『心(認知・感情・思考・動機)』ではなく、人と人の中で語られる『ナラティブ(物語・語り)』である」とやまだは強調します。ナラティブ研究のアプローチは、一方的な因果関係を探る目的には適さず、調査者と参加者の「相互行為的なやりとりによる語られ方、物語の構成のしかたや意味づけ方、語りの変化プロセスなどを問う研究が適している」とされます。したがって、語りを事実(fact)の母集団の一部としてのデータやサンプリングとみなし、「どこまでが虚でどこまでが実か」という見方は避けず、「嘘」の語りにも社会文化的な物語の引用があるという見方をとります。この研究方法では、参与観察、インタビュー、またはアクションリサーチのように積極的に相互影響する過程を生み出してその相互作用から初めて見えてくる真実に着目することが求められます。ここで代表的な手法となるのがインタビューです。ここではインタビュアーも取材されるインタビューイ(interviewee)も、聴き手と話し手に分節されない相互行為の参加者として扱われます。フィールド研究のようなノート記録は、インタビュー・プロセスの相互行為にかかわる当事者として省察的に扱いくいものになります。そこで、デジタル録音機を使うことを前提にし、語りを書き起こすトランスクリプトもインタビュアーとインタビューイの発話の両方とも記述されるようになりました。エスノグラフィーの項で前述したようなインタビューの形式も、ライフストーリー・インタビューやフォーカスグループ・インタビュー、アクティブ・インタビューやロング・インタビューなどといった多様に発展する技法から人間科学の方法論として整備が必要だと言やまだは指摘しています。特に、ライフストーリー・インタビューは、「経験の組織化と意味の行為としての物語」を照らすものです。80年代に私たちの思考の様式を論理科学モードと「物語モード」の二つ区別したのはブルーナー(J.S. Bruner)でした。

「物語モード」という思考様式は、「世界を描写し直すためのモ

デル」とも言われます。人びとは経験いかにして意味を与えるのかを問うとき、「出来事の関連や組織化のしかたに向かう物語の様式」として浮かび出すモデルです。これまで、自己はアイデンティティーをもち分割できない実体として一貫性をもつものとして考えられてきました。が、ナラティブの世界観では、「自己は物語的に組織されるので、複数ありえるし、時や場所によって変化しうるし、ストーリーを書き換えることも可能になる」と捉えます。こうした「物語的自己」の捉えは、インタビューに臨む姿勢や形態にも影響します。VTRに記録された些末な出来事の継起を延々と眺めるだけで行動が理解できるだろうかという疑問から、「行動を理解するためには何らかの編集作業が必要であり、物語とはその編集作業のことである」とされます。そこで、インタビューではエピソードの有無だけでなく、前後の体験との関連づけのしかたや体験の意味づけに注意し、開かれた質問（オープニングエスジョン）を展開するように心がけます。

#### ⑤ パーソナル・コンストラクト・アプローチ

このアプローチは、ジョージ・ケリー (G.A. Kelly) により1950年代に考案され、パーソナル・コンストラクト心理学 (Personal Construct Psychology) と不可分な関係にあります。「私たちが包く主観的な現実、私たちが過去の経験に対して与えた意味に基づいていて、出来事それ自体ではない」というのがケリーによる研究デザインの出発点です。ケリーは、この主観的な経験の解釈 (construing) の枠組みを「コンストラクト(構成)・システム」と名付けました。そのシステムは、「類似点や相違点、または両極をなすコンストラクトの膨大な積み重ね」であって、「中核をなす上位コンストラクト」が私たちの生活を個人的に秩序づけるとともに、たくさんの「下位コンストラクト」をもつとされます。キャロル・ティンダール (C. Tindall) はコンストラクト・システムを「両極をもつ価値観のなかからコンストラクトは意味を獲得し」、「類似点は相違点という文脈のなかでだけ理解され」、「コンストラクトは非常に個別的で個人的に理解されるもの」と説きます。では、こうした認知過程から照らし出される個人のパーソナリティは、どのような研究成果をもたらすでしょうか。先のティンダールによれば、ケリー研究の中核要素は、「リフレキシビティー (反射性)」であり、個人的な経験の豊かさに関連性のすべてが認識されると、そこにかかわった人全員に新しい理解と自己発達をもたらす、自己の「リコンストラクション (再構成)」へ開かれていくと説明されています。データ収集は、パーソナル・コンストラクト技法と呼ばれる手順で進みます。具体的には、「レポーター・グリッド」という表づくりを通して、参加者たちが何に関心を持ち、どのように理解しているかを照らし出すことを目指します。まず、参加者にとって個人的に重要なことを集めてトピックを選び出します。次に、トピックの解釈を生み出す要素 (エレメント) の数を決めます。

さらに、探索しようとするコンストラクトを取り出すために3つのエレメントを選びます。3つのうち類似点をもつ2つに×を、

相違点をもつ3つ目に○をつけます。×をつけた類似点を左端に、○をつけた相違点を右端にことばで記述していきます。できあがったレポーター・グリッドには参加者によるトピックの理解が可視化されるというものです (図2)。この他にも、インタビューによってコンストラクトの次元を下げたりながら理解の様相を探る「ラダリング」と呼ばれる方法もあります。



図2 パーソナル・グリッドの例

#### 4 おわりに

ここであげた多様なアプローチは、授業者が題材実践の先にもつ問題を探る手法として応用発展させてよいのではないかと考えます。例えば、ライフストーリーのように、インタビューによるデータ収集など不可能に近いと思われるかもしれませんが、聞き手と話し手を子ども同士のペアで設定したり、学習過程をヒストリー・トークとして伝え合ったりすることで、学び経験を編み直すことも研究課題にできるのではないのでしょうか。新しい授業研究の方法論を生み出すのは、当事者になってみることから始まると考えられます。

#### 〈引用参考文献〉

- 茂呂雄二『対話と知 認知科学入門』新曜社、1997
- 茂呂雄二編著『実践のエスノグラフィー』金子書房、2001
- 柴山真琴『子どものエスノグラフィー入門』新曜社、2006
- 山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、2004
- 橋内 武『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版、2009
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎 誠『言語研究のための統計入門』くろしお出版、2010
- 戈木クレイグヒル滋子『グランデッド・セオリー・アプローチ 理論を生み出すまで』新曜社、2006
- やまだようこ編『質的心理学の方法』新曜社、2007
- P・バニスター、E・バーマン、I・パーカー、M・テイラー、C・ティンダール著、五十嵐靖博・河野哲也監訳、田辺 肇・金丸隆太訳『質的心理学研究法入門 リフレキシビティーの視点』新曜社、2008

## 図画工作科の授業における共感性の育成

伊藤龍豪 (神奈川県川崎市立南生田小学校)

### I はじめに

筆者はこれまで14年間にわたり小学校教諭をつとめ、子どもと過ごしてきたが、コミュニケーション能力の問題について実感することが近年増えてきている。例えば、クラス替えをした後に、新しい人間関係を築くまでに時間がかかる子どもが多くなってきていることや、友達とトラブルになった際に、当事者どうして解決することが難しくなっていることなどが挙げられる。自分の発言や行動が相手にとってどのように感じられたのか、相手の立場に立って考えることが難しくなっているように感じている。しかしそうした一方で、企業が学生を採用するにあたって重視する能力として、「コミュニケーション能力」を挙げています。さらに、経済協力開発機構が、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を「キーコンピテンシー」として定義付け、その3つのカテゴリーの一つに「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を示しているなど、これからの時代を担う子どもたちにとってコミュニケーション能力は重要なものとして位置付けられている。以上のことから、小学校教育においてもコミュニケーション能力の育成が期待されているといえよう。

そこで筆者は本稿標題に示されているテーマで授業研究に取り組んでいる。その研究では、まず、コミュニケーション能力や共感性の定義を明らかにし、小学生に求められる共感性について検討している。そして、その共感性の育成過程を示す。次に、図画工作で共感性を育成することの意義を明らかにし、その学習プログラムの開発を試みた。その概要を報告する。

### II 共感性育成のための学習プログラム開発

#### 1 理論的背景

##### (1) コミュニケーション能力と共感性についての検討

コミュニケーション能力といっても、それぞれの場面や文脈においてそのとらえは同じではない。そこで、コミュニケーション能力について、辞書的定義や齋藤孝の論を用いて、意味や感情をやり取りしながらそれを理解する力であると規定した。

感情を理解するとはどのようなことなのだろう。日常生活において相手の感情を理解したというのは、自分も全く同じ感情になったときや、自分は同じ感情にならなくとも、「相手はこのような感

情をもつだろう」と想像して考えることができたときである。いわゆる「共感」である。そこで、「共感」について心理学領域から、アプローチすることにした。さらに、「共感」と「社会的行動」の関係について検証している先行研究があることが明らかになった。これらの研究成果や文献の調査により、本研究では、共感性の下位概念のうち「視点取得」を扱うこととした。

共感性の育成過程については、「視点取得」と似た概念である「思考的気づき」が「他者受容」「自己受容」「葛藤体験」を通して育成されるとした、平井信義の「思考的気づき」の育成理論<sup>1</sup>を採用した。

##### (2) 図画工作と共感性の関係についての検討

図画工作において共感性を育成する意味について、造形活動の特徴やその教科特性から検討した。

図画工作において子どもは、形や色を基に自分なりの意味や価値をつくりだしながら造形活動に取り組んでいる。それゆえ、子どもの活動や表現は、最大限尊重されるものであり、子どもの活動や表現は、本来ありのままに受け入れられるものであるといえる。このことは、先に述べた「受容体験」へとつながるものである。同様に、子どもが図画工作において表現することは、すなわち自己表現であり、「自己受容」へとつながるものであると考える。

言い換えると、図画工作においては一人一人が感じたことがすべて「こたえ」なのである。例えば、同じものを見た場合においても、見る者によって「美しい」、「美しい」という正反対の正解が生まれることになる。それを知った場合、「葛藤」が生じることは想像に難くない。図画工作において、「葛藤体験」が生まれることが想定されるのである。

以上のことから、図画工作においては、「思考的気づき」の育成過程である「受容体験」「自己受容」「葛藤体験」が網羅されるとともに、自分のありのままを表現したり、それを受け止めてもらえたりすることが許される教科特性があることが分かる。

さらに、学習指導要領の記述を分析した結果、授業の中で子どもが共感性を発揮したり、子どもの共感性を育成したりすることが想定されていることが明らかになった。そして、その記述はとりわけ鑑賞領域に顕著であるから、特に鑑賞の指導において意識されるべきものであると考えられる。

### (3) 図画工作における共感性のあらわれ

図画工作の授業実践から、共感性のあらわれについて以下の方法により検討した。

- ・ビデオによる記録と筆書き記録から、共感性が発揮されていると考えられる場面を抽出する。
- ・子どもの発言内容を分類する。
- ・カテゴリ化した発言内容と共感性の下位概念との関連を検討する。



その結果、友人の失敗や不満足な状況を和らげようとする発言や、友人の行為や作品を称賛する発言など、確かに共感性が発揮されていると思われる発言がみられた。そして、その発言は、自他の作品や行為を「見る」ことをきっかけとして行われることが認められた。その発言内容について以下のようにカテゴリ化した。

- 【同意】：友人の発言に対して同意する
- 【称賛】：友人の行為や作品を称賛する
- 【繰り返し】：友人の発言を繰り返す
- 【慰め】：友人の失敗や不満足な状況を和らげる
- 【付け加え（想像）】：友人の発言に関連する内容について想像し新たに付け加える

そのうえで、共感性の下位概念である「視点取得」「共感的配慮」「個人的苦痛」「想像性」との関連づけを試みた。

### (4) 図画工作における共感性の育成について

学習指導要領の分析と図画工作の授業における子どもの発言分析により、共感性と鑑賞との間に関連性があることがわかった。そこで、図画工作においては「鑑賞」によって共感性の育成が図られるものと考えた。

しかし、図画工作において「鑑賞」は、「能力」なのか「領域」なのかという混乱が存在しているとの指摘がある。そこで、大泉義一が子どもの「能力」を視座に再構造化した鑑賞カテゴリー2をもとにして、各カテゴリーと「思考的気づき」の育成理論との関係について検討した。育成理論のうち、とくに他者の気持ちと

のぶつかりあいを経験し、克服していく「葛藤体験」との関係について詳細に検討した結果、共感性の育成に寄与するであろう鑑賞カテゴリーを「相互鑑賞」とした。

## 2 学習プログラム開発

### (1) 学習プログラム開発の視点

学習プログラム開発の視点について、「葛藤体験」における「他者との気持ちのぶつかり合い」と「気持ちの調整」に焦点をあて検討した。

「相互鑑賞」において「葛藤体験」が生じるには、鑑賞対象をどのようなものにするのかが重要だと考えた。そこで表現題材を表現者の意図と鑑賞者のイメージを交流した際に、容易には一致しないような題材。さらに、表現者が自分の思いを込められるような題材が適していると考えた。

#### 【学習プログラム開発の視点】

##### 表現題材について

- ・表現者の主張が強まるように、偶然あらわれるようなものではなく、主題など自分のこだわりを持つことができる題材
- ・鑑賞者が自分なりに想像を広げることができるように、抽象的な表現となる題材

次に、相互鑑賞の場面の設定について検討した。相互鑑賞には、教師が意図的に学習活動を設定する場合と、子どもの自発的な活動による場合とがある。共感性育成のための学習プログラムを考えるにあたっては、教師の意図的な設定が必要であると考えた。そのうえで、気持ちのぶつかり合いが生まれる活動や、自分の気持ちの調整が図られるような活動取り入れることによって、葛藤が生じ、そしてそれを克服する経験ができるものと考えた。

#### 【学習プログラム開発の視点】

- ・鑑賞活動は教師が意図的に設定
- ・鑑賞者が、感じ取ったことを表現者に伝える活動の設定
- ・鑑賞者からなぜそのように感じたのか、その理由を聞く活動の設定
- ・表現者もまた、自分の表現の意図を鑑賞者に伝える活動の設定
- ・表現者と鑑賞者が互いに自分の思いを伝え合う活動の設定

## (2) 学習プログラム開発・実践

先に示した「学習プログラム開発の視点」を基に、表現題材における相互鑑賞の場面で、共感性の育成を期した学習プログラムを開発し、実践した。

・題材名 「自分の心を見つめて」

・題材のねらい

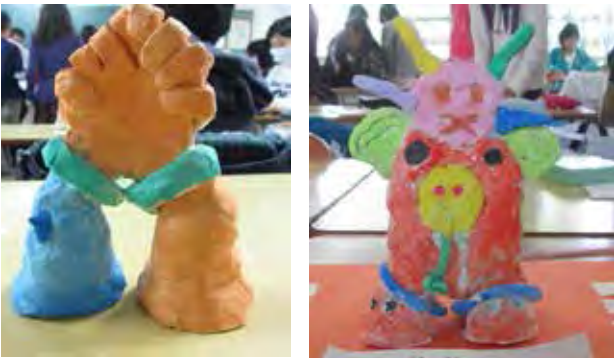
自分の今の気持ちを見つめ、そのイメージを自分なりに形や色を工夫しながら立体に表す。

・題材について

自分の今の心や感情を見つめ、そこから広がったイメージを形や色を工夫しながら白い粘土で立体に表していく題材である。

・指導計画 (全5時間)

- 1) 立体で表現された美術作品を鑑賞する。
- 2) 自分の心を見つめ、今の気持ちを粘土で立体に表す。



- 3) グループに分かれ、互いに作品を鑑賞し合い、自分が見つけたよさや美しさや、作者が作品に込めたであろう思いなどを付箋に記入する。



- 4) 記入した付箋をもとに、感じたことを伝え合う。



## (3) 考察

上記実践をもとに子どものワークシートや質問紙を分析し、それが、共感性の育成に寄与するものであったかを検討した。その結果、「たのしい気持ちも表したのに、つらい気持ちを表しているといわれ、えっ と思った」といった記述から分かるように、相互鑑賞場面において、自分の作品に対して自分の表現の意図と異なることを伝えられたことによって、「葛藤」が生まれたことが明らかになった。そして、その後の活動によって、「気持ちの調整」がはかれ、葛藤を乗り越えていったことが、「作品の色形のことを説明されて納得した」という記述に見ることができた。

以上のことから本学習プログラムが、子どもの共感性の育成に寄与するものであったことが示唆された。

## Ⅲ おわりに

本研究では、図画工作における共感性育成の意義について考察したうえで、相互鑑賞における共感性育成のための鑑賞プログラムを開発した。また、図画工作において、社会に求められているコミュニケーション能力の一つといえる共感性が育成される可能性を示した。

今後は、他の鑑賞カテゴリーについても、実践を通してさらに詳細に検討していきたい。また、複数の題材、複数の学年によって検討することにより、より詳細な共感性のあらわれを見ることができよう。そして、それがまた、共感性育成のためのプログラム開発に生かせるものと考えられる。

## 註)

- 1 平井信義ら「『思いやり』の精神構造とその発達過程 (第18報)：葛藤体験への関わり」, 日本保育学会大会研究論文集 (54), 2001年, p. 335
- 2 大泉義一『感じて動く—鑑賞の活動化—』日本文教出版, 2013年, p. 2

## 研究ノート

# 関西ものづくりワールドでの3Dプリンターに関する講演と次世代ものづくり教育の構造

佐藤昌彦 (北海道教育大学)

### はじめに

3Dプリンターに関する世界ファブラボ会議 (横浜市, 2013.8.26) から1年が過ぎた (註1)。今、3Dプリンターはどのような状況にあるのか。社会におけるその後のものづくりの動きを把握するため、関西ものづくりワールド・特別講演会に出席した (ハイアットリージェンシー大阪, 大阪市, 2014.9.24)。そこで示された3Dプリンターの現在の状況を報告する。さらにそうした社会の動きを踏まえての次世代ものづくり教育の構造についても述べたい。

### 1. 関西ものづくりワールド・特別講演会では3Dプリンターに関してどのような状況が示されたのか

関西ものづくりワールドでの講演は2つ。1つは、Stratasys (ストラタシス) アジア太平洋地域&日本担当ゼネラルマネージャー: ジョナサン ジャグロム氏による「3Dプリンタが切り拓く、次世代の『日本流』ものづくり」(関西ものづくりワールドでは「プリンタ」と表記。そのまま記載した)。もう1つは、経済産業省製造産業局素材材料産業室: 室長・遠山毅氏による「3Dプリンタによる新たなものづくりと経済産業省の取組み」。現状に関わるポイントは次の2つ。

- 試作品だけでなく最終製品としての活用
- 課題は、新たなものづくりに対応した人材の育成

ジョナサン ジャグロム氏の講演では「製品開発の場で複数のスタッフがそれぞれの考えを形 (実物) にして持ち寄ることができる」という試作品に関する内容とともに「飛行機にすぐ取り付けることができる」「脳外科で手術のトレーニングができる」という最終製品としての活用に関する取組みが紹介された。講演の案内

文にも「3Dプリンタは、単なる試作、デザイン分野での活用の枠を越え、最終製品、部品、治具など製造現場での活用が可能となった」と記されている。また、Stratasysのパンフレット「3Dプリンタ入門」には「DDM: ダイレクトデジタルマニュファクチャリングとは、3Dプリンタを使って、CADデータから最終製品を直接製作する試み」として「航空機や自動車用パーツ、家電など小ロット実製品として3Dプリンタが利用されています」「一人ひとりにカスタマイズできる特性を活かし、医療現場でも新たな解決策を提供します」との記述がある。

遠山毅氏の講演でも試作品や最終製品に関する「①活用事例」「②新ものづくり研究会」「③不適切利用」「④今後の課題」についての紹介がなされた。主な内容は以下のとおり。【①活用事例】《自動車》透明素材での造形による高度なシミュレーションの実施 (潤滑油の流れがよくわかる)。《航空宇宙》エンジンの複雑部品、軽量化が求められる部品の一体造形。《医療》個人向けにカスタマイズした人工関節・人口骨の製作。手術シミュレーション用の人体モデルの造形。【②新ものづくり研究会】《本質》「近年、3Dプリンタが急速に注目を集めている。その本質はプリンタそのものではなく、『デジタルデータから直接様々な造形物を作り出す』ことでありデジタル製造技術の発展を一気に加速するものである」。《欧米各国と我が国の動き》「一方、欧米各国が、ものづくりにおけるこうした新しい動きに対して、産学官を挙げた取組を進めているものの、我が国は対応が遅れているとの指摘もある」。《問題意識》「こうした背景を踏まえ、この新しい技術の利用可能性・産業競争力に関する戦略・必要な政策等を検討する」。【③不適切利用】《メーカー・輸入代理店等の取組み》(「殺傷能力のある樹脂製の拳銃を3Dプリンタで製造。2014年5月逮捕」に対して) 2014年6月、「3Dプリンター振興協議会」を立ち上げ、不正利用の防止を呼びかけた。



図1 3D INSIDE PRINTING / 東京ビックサイト (国際展示場) / 2014.9.17 ~ 19 ■ 3Dプリンター (左) ・OBJET500CONNEX3, マルチマテリアルのカラー3Dプリンター, www.stratasys.co.jp / Stratasys。■ 3Dフルカラーボディスキャニング・・・3D全身スキャナー (中央, 円の中心に人間が立つ。外側のカメラが回転する) とフィギア (右) / www.artec3d.com / Artec Group。パンフレットには「全身スキャン時間12秒 / 3Dモデルの自動生成処理時間3分」とある。■ コピー用紙を素材とした3Dフルカラープリンター「McorRIS」の展示もあった。  
<http://www.jbm.co.jp/mcor/index.html>

以下はその声明文である。「3Dプリンターは、1987年に第一号が出荷されてから四半世紀以上が経過しました。今や、3Dプリンターは7種類造形方式に分類され、材料もプラスチックから金属までと多様化し、『ものづくり』に革命をもたらすものとして、自動車や家電等の製造業や医療分野からも大変注目されるようになりました。特に近年では、主要な基本特需が切れてきたことにより低価格の3Dプリンターが登場し、オバマ大統領の『3Dプリンターで米国国内のものづくりの復興をなす』との宣言や、『Makers』や『ものづくり革命 (Fab)』等の書籍の出版により、3Dプリンターは多くの方々の知るところとなりました。日本に於いても、経済産業省による産学官連携の大型研究開発プロジェクトが生まれ、様々な産業において3Dプリンターの実用化が進みつつあります。この様な折に、日本国内において3Dプリンターで銃を製造し、逮捕者が出るという事件が発生しました。米国での銃製造を真似たものですが、日本国内での銃の製造や所持は違法行為です。(中略) 日本における3Dプリンター技術と産業の健全な発展のため、我々3Dプリンター業者はこの度、『3Dプリンター振興協議会』を発足させました。【④今後の課題】「新たなものづくりに対応した人材育成」は以上のような3Dプリンターの状況に対して提起されたものである。

なお、3Dプリンターに関する東京ビックサイト（東京都、2014.9.17～19）やインテックス大阪（大阪市、2014.9.24～26）での展示については写真でその一端を示した（図1・2）。

## 2. 3Dプリンターが登場する時代のものづくり教育の構造をどうすればいいのか

では、社会におけるそうしたものづくりの動きを踏まえれば、今後のものづくり教育をどうすればいいのか。その指針となる教育の構造を下に示した。

原点 (手づくり) ～ 先端 (3Dプリンターなど) 責任 (生命・自然)
--

上段は「原点 (手づくり) から先端 (3Dプリンターなど) まで」。「先端」という部分だけではなくものづくりの全体を視野に入れた。下段にはものづくりの基盤として「責任 (生命・自然)」を位置づけた。いろいろな事故や事件などを考えれば、責任の本質は「生命を守ること」でありその基本は「自然」にある。「人間は自然の

一部、自然に支えられてこそ生きることができる」という考え方を重視した。

教育の構造は「過去・現在・未来」に関わる考察に基づいて提起した。検討のプロセスにおいても、目の前のことだけではなく、全体的な視点を大切にしたいと考えたからである。「過去」に関しては「戦後 (1945年以降) ものづくり教育の系譜」についての検証を行った。「① 1969 (昭和 44) 年中学校学習指導要領改訂 (美術科に『工芸』領域導入、週 1 時間増)」「② 全国工芸教育協議会の活動 (1973 年設立)」「③ ハンド 101 - ものづくり教育協議会の活動 (1987 年設立)」などから、創造面や技術面とともにものづくりの「責任 (生命・自然)」や「手づくり (手の働き・身体の働き)」を大切にしてきた歴史を学ぶことができた。「現在」に関しては「工作・工芸教育発祥地：フィンランド」「世界最大級の日用品市場：中国・義烏 (イーウー)」での教育視察を通してものづくりの責任に関する検討を行った。「全国学習指導要領にもものづくりの『責任』を明記 原点 (手づくり) と先端 (3Dプリンターなど) の併存、生態系・環境の重視 (フィンランド)・伝統 (剪纸/切紙) の重視 (中国) など、多くのことを学んだ。今回の3Dプリンターを活用したデジタル・ファブリケーションは「未来」に関わる事例として取り上げている。

## おわりに

本報告は「次世代ものづくり教育研究—日本人は責任の問題をどう解決するのか—」に関する考察の一環として行ったものである。責任の問題とは、福島原発事故の根本的な事故原因である「生命を守るという責任感の欠如」を指す（『国会事故調報告書』、徳間書店、2012）。今後は「ホワイトテーブル in 札幌—3Dプリンターが登場する時代の造形美術教育—」（講演&シンポジウム、2015.2.11、13:00～17:00、北海道教育大学札幌駅前サテライト）での検討内容に基づいて次世代ものづくり教育の基本的な方向を明確にしたい（註2）。原点から先端までを俯瞰した教育。責任の問題を解決するための鍵はそこにある。

註1 佐藤昌彦「第9回世界ファブラボ会議国際シンポジウムと次世代ものづくり教育」『美術科教育学会通信』N0.85 (2014.2.18) でシンポジウムの内容を報告した。

註2 講演Ⅰ/蓮見孝、講演Ⅱ/渡辺晃一、シンポジウム/森實祐里、山崎正明、徐英杰、コメンテーター/宮脇理、企画・ファシリテーター/佐藤昌彦。



図2【関西ものづくりワールド/インテックス大阪(国際展示場)/2014.9.24～26】■3Dデータ作成ソフト…SolidWorks(左,中央上はパンフレット表紙),www.solidworks.co.jp ■3Dデータ作成ソフト…Geomagic Sculpt(中央下はパンフレット表紙,右), Geomagic Freeformのパンフレットには「モニター上の3Dモデルに触れると、感触が伝わってくる」「視覚に加え、触覚を使うことでコンピュータ上のデザインモデルを3次元的に認識する」「運用事例/ (CTやMRIのデータの画像を3D化し) 手術のシミュレーション等で活用」との記載がある。  
<http://geomagic.com/en/products/sculpt/overview>

## 新刊紹介

三澤一実<監修>

# 『美術教育の題材開発』

大橋功 (岡山大学)

本書は、美術教師をめざす教職課程で学ぶ学生のための教科書として編纂されたものようであるが、その帯で「楽しい授業、つくっていますか」と問いかけているように、学校教育現場で美術教育にとりくむすべての教師が読み、そのあり方を見直す上で重要な役割を果たすものでもある。

まず「美術教育の題材開発」と題されているように、具体的事例をもってそれぞれの分野におけるエキスパートによってわかりやすく解説されている「第4章 題材開発研究」に最も多くの頁が割かれている。

しかし、本書は単なる題材集ではない。美術教師として新たに教育現場に立つ者のみならず、多くの美術教師が直面する深刻な課題などをふまえ、その克服のために必要な学びを意識した構成になっている。

たとえば、監修者である三澤一実氏は「第1章 美術教科の特徴と今日的課題」の冒頭において「美術は時代とともに変化するものである。同時に時を経ても変わらない価値を扱うものでもある。よって美術が公教育に教科として存在する意味は、常に新しい時代を創り出していく創造力の獲得と、今までに創り出された人類の普遍的価値を学ぶ意味がある。」と美術教育の基本理念をまず押さえている。

その上で、「個々の感性に基づいた美術の特性は、各々の価値意識を基にそれらをつないでいくメディアとしての機能を持って」おり「そこには考え方の異なる人と人とのコミュニケーションが作品や造形活動を介して成立している状況が見て取れる」のであり「美術を学ぶということは、これからの社会を生き抜くコミュニケーション能力を育成することになる。」と明言し、美術教育は、戦後以来の「子ども中心主義による造形教育を引き継ぎつつ、より社会や時代を意識した新たな学びを学校教育に位置付け」という「新たな役割をもち再編されるべき」だと述べている。

したがって、本書は、これまでの教職課程用テキストの領分を超え、この「新たな役割をもち再編されるべき」美術教育のあり方を理論的かつ具体的に示し、自らの実践を振り返り改善し続ける美術教師を育てていくことをめざしている。

だからといって急進的な教育改革を扇動するような内容ではない。むしろ現在の教育全体の課題をふまえて、その中で美術教科を担う教師として何が求められているのか、理解すべき要諦が過不足無く示されていると言えるだろう。

また、「第1章第2節 学習指導要領の理解」を担当するのは元文部科学省の教科調査官の村上尚徳氏。さすがに現行の学習指

導要領編成の中軸を担った著者らしく、学習指導要領とは何なのか、どのように読み解き授業づくりに結びつけるのか、さらには「授業の改善」に至るまでをわかりやすく示している。また、第1章から第4章までの各章に挟み込まれている神野真吾氏によるコラムは、美学の視点から「文化としての美術や、美術の歴史を学びとして捉

えるには、「よい作品」とされているものを単純に「感じる」ということでなく、その作品の価値を支えている文化を理解した上で、その評価・価値を知ることが大切」として、「美術が「わかる」とはということか？」からはじまる。

その中で、美術を読み取る「コード」が存在するかそれをすべて学校で教えることは困難であり、その取舍選択が教師の個人的な経験や都合に合わせた内容選択になっている点を批判するなど、今一度美術教師が反省的に捉え直すべきポイントが明快に指摘されている。

さらに特筆すべきは、第5章に「特別支援教育と美術」が大きく扱われている点である。幼児教育や小学校の低学年における美術教育に加えて、特別支援教育の現場において見過ごすことのできない深刻な誤った実践が少なく無い実態がある。

そこには何をどのようにすれば良いのか、理念も手立てもわからないまま、長きにおいて作品づくりをさせることや、技能訓練がその役割であるとの誤謬が放置されているという問題がある。そのような中、「特殊教育」から「特別支援教育」になった背景と、そのことにより教育現場でどのような新たな課題が生まれているのかを示しつつ、特別支援教育の多様性と困難さを十分ふまえた上で、具体的事例を示してわかりやすく伝えている点は、他に見えないものである。

本書からは、教師をめざす学生にも、今まさに美術教育にとりくむ教師にも、学校教育と美術教育の現況と課題を十分理解した上で、題材開発力を中心に、授業を組み立てる授業構力、学習指導力、自らの授業を改善し続ける力などを備えていって欲しいとの願いが読み取れる。





## 新刊紹介

# 玉川信一・石崎和宏<編著> 筑波大学「未来の子どもの育ち」プロジェクト<企画> 『アートでひらく未来の子どもの育ち』

栗山裕至 (佐賀大学)

本書は、2010年から開始された筑波大学の学内共同研究プロジェクト「未来の子ども育ち研究支援センターの創設」の成果の一つとして刊行されたものである。

編著者である玉川信一は本書冒頭で、「成長したあとに、いつ、どこで、どんな環境になろうとも多様な価値観を受け入れることができる柔軟な感性と機動性のある対処能力は、子どものときにしか学べない」と述べ、本書中の事例や提案が「それらを形成するうえで重要な役割を果たせるのではないか」という期待も持っている」と力説する。事実、この本に収められている内容は様々な刺激に富み、しかも現実性を欠いた空論は無い。一読して驚くのは、それぞれの書き手の真摯な姿勢と“熱い”教育への思いである。

洋画を専門とする仏山輝美は、筑波大学が地域貢献として取り組んだ壁画制作の詳細な報告を行なっている。そこで生み出されるのは、使われなくなった公共の建物や古民家の空間に再生される「土地の記憶」といえるか。それは、かつての出来事の記録提示とは異なり、制作者それぞれが場の空気を呼吸し、人々の暮らしに思いを馳せながら、新たな物語を造形化するという果敢な活動である。伝統的フレスコ画技法の正当な導入だけでなく、壁面の状態に合わせて日本画や油彩画の技法も取り入れるなど、絵画技法研究としても画期的である。

田島直樹は、版画の一技法である「モノタイプ」を、幼児を対象に実践したユニークな試みを行なう。田島は版画の元となる「版」に何度も手を加え、その都度変化していく「刷り」の内容を確かめるところに意味を見出し、下絵から版の作成、そして刷りへと進む版画の段階的の工程に何とかして試行錯誤の要素を組み入れることで、独自の発想をさらに加えたり、シリーズのように出来上がった作品から新たに物語を紡いだりしていけると提案する。そこには、手間をかける「間接技法」の版画だからこそ生まれる学びの可能性が見出される。



木材彫刻を専門とする大原央聡の論考はユニークである。木材を切削・加工して表現するような造形活動を想定した場合、児童・生徒に対しては「より軟らかい材質の木材」を与えるのが適切と考えがちであり、実際に教材カタログ等でもそのようなラインアップとなっている。しかし、大原は食材を包丁で切る場面を例に挙げながら、「軟らかい材料ほど切削は難しいのだ」と述べる。また、刃物を使う場合の安全指導についても、刃物を持っていないほうが手が刃先にあることがけがの原因となることを踏まえ、「では、なぜその手が刃先にあったのか」と問い、材料がしっかり固定されていないことが問題なのだとする。こうした指摘は、実材を扱う表現学習が減少している図画工作科・美術科の教科指導において、かつては共有されていたはずの知識や経験の再確認を求めるものといえる。

田中佐代子の論考は、ビジュアル・デザイン教育の今日的課題をわかりやすく指し示してくれる。田中は今日の図画工作科や美術科に加え、小中学校の「書写」や高等学校「情報」までを射程に置き、そこで求められる「わかりやすい表現」という内容が具体性を欠いているために効果的なビジュアル・デザイン教育として結実していないと指摘する。その上で、「レイアウトの基本」「効果的な配色」「効果的な書体の選択と文字組の基本」について具体的に例示を行ない、「わかりやすく伝える力」の育成へ向けた展望を提案している。

書道を専門とし、書写教育の観点から興味深い論を展開しているのが菅野智明である。書写と図画工作科・美術科との関連について本格的な検討や研究例が非常に乏しい中、菅野は学習指導要領の記述内容を踏まえ、「パラランゲージ（周辺言語）的要素」や「身体性」、さらに手書き文字と「個性」について言及しながら、今後の書写教育や美術教育の課題と可能性を探っている。先の田中と同様に、ビジュアル・デザインの諸要素（例：レイアウトにおけるグリッドシステム）について菅野が取り上げている点は興味深い。

日本画家太田圭による「子どもアート・デイ・キャンプ」実践の報告と、技術職員の林剛人丸による表現と鑑賞のワークショップ実践の報告は、開かれた大学の在り方や、芸術家が美術教育実践に関わることでどのような表学習成果の実現や地域社会への貢献が可能であるのか、等をめぐる内容である。大がかりな企画を継続しつつ内容を充実させていくことの難しさ、学校・芸術家・美術館それぞれの特性や個性を生かしながら連携させる大変さなど、それぞれに明らかとなった課題も含め、非常に刺激的な事例となっている。

教科教育の立場からは3つの論考が収められている。

直江俊雄は、既に多くの知るところとなっている「アトライティング」の教育的意義について、このコンクールの企画運営に直接携わる立場から丹念に読み解いている。高校生のアトライティングから読み取れる書き手の思考や感情の生々しい変化、また造形美術への分析や解釈が深化や拡充をしていく過程は、非常に興味深い。「文章で考える過程そのものがアートに関する体験を深め」という、これまでにはなかった新たな美術教育実践の開拓領域

であり、今後どのような展開を見せていくのか注目される。

岡崎昭夫は、米国の美術教育理論を背景に置きながら、児童期から思春期・青年期に至る発達段階と、美術教育実践の内容や方法とを対置しながら、現在の美術教育がある種慢性的に抱える課題を明快に指摘する。そして、「従来の自己表現から印象批評による鑑賞への方向ではなく、多様な表現モデルの鑑賞から最終的には自らの表現スタイルの探究へ向かうこと」が、特に小学校高学年からの造形美術学習に必要であると力説する。米国のビデオプログラムや教科書の詳細な例示紹介と合わせて、今後の美術教育刷新に授業レベルで直結する示唆的論考である。

石崎和宏（編著者）と王文純は、芸術に関わるコンピテンシーやリテラシーの内容や相互関係について、認知プロセスや創造性との関係から多角的に論じている。さらに、芸術的なコンピテンシーを測定する尺度の開発と実態調査から、芸術的文脈で考えを組み立てていくという活動の中で、視覚イメージとことばの相互作用がうまく生かされることを実証的に提示している。コンピテンシーやリテラシーをめぐるのは、それを図画工作科・美術科に引き寄せながらどのように具体的にかみ砕いていくのかが課題となっているが、そのための足掛かりを提供する内容として重要である。

自由に越境・横断しながら具体的に実践し考察する教科内容学と、学習活動の実態や特性を踏まえながら教育課題の解決へ迫る教科教育学。それぞれの専門家の力が結集された、まさに必読の書といえよう。

# 本部事務局より

## ■第37回学会上越大会の総会での委任状について

平成26(2014)年度総会は、第37回美術科教育学会上越大会1日目、2015年3月28日(土)の12時25分より13時20分までの時間帯で開催予定です(開会行事含む)。会則で定めていますように、総会は学会の事業及び運営に関する重要事項を審議決定する学会の最高議決機関であり、会員の5分の1以上(委任状を含む)の出席がなければ成立しません。やむを得ない事情で総会に欠席される方は、同封の委任状(郵政はがき)に必要事項を記入、押印の上、3月18日(水)までに投函してください。

## ■2015会計年度の会費納入をお願いします。

2015会計年度は1月より12月までですが、2015年8月末から9月初旬の理事会にて会員名簿の報告・承認をしますので、7月31日までに納入いただくようお願いいたします。また、2014会計年度までの学会費未納の方は、至急全額納入をお願い致します。

3月の年次大会、リサーチフォーラム、地区会、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。年会費納入状況については、会員情報管理システムにログインすることにより照会も可能です。

### 注意事項

次年度学会誌(第37号)への投稿並びに次年度大会(第38回大会)での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の2つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること

②当該年度(2015会計年度)までの年会費を全て納入済みであること

学会誌への投稿締め切りは、2015年8月下旬、大会での口頭発表申込みは、2015年12月初旬の予定です。十分にご注意下さい。

\*会費を2年間滞納した場合は、会員資格を失います。

### 新しい会費振り込み口座名、番号

同封の振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の新しい口座に納入してください。

銀行名：ゆうちょ銀行

口座記号番号：00140-9-551193

口座名称：美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2015会計年度会費」等、会費の年度および会員ID番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は下記内容を指定してください。

店名(店番)：〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)

預金種目：当座

口座番号：0551193

### 大学院生等への会費減額措置(申請は毎年必要です)

大学院生等は、所定の手続きにより、年会費を半額(4,000円)に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は、毎年、5月中に各自、申請手続きをすることになっています。申請しない場合は、減額措置を受けられません。詳細は、学会ウェブサイトをご参照ください。

[http://www.artedu.jp/bbg4um0dy-8/#\\_8](http://www.artedu.jp/bbg4um0dy-8/#_8)

### ■学会誌第36号に投稿され、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第36号に投稿された皆様の中で、掲載負担金について公費払いを予定している会員にお知らせ致します。公費払いとは、大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。

掲載負担金の請求は、掲載ページ数が確定した時点(3月初旬を予定)でお伝えします。学会誌編集委員会・支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし、各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は、そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは、手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み、各所属先で前もってご確認いただき、相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

### 留意事項

1. 原則として、必要な書類は、投稿者自身で作成いただき、書類等に捺印が必要な場合は、本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は、本部事務局支局からの「振込負担金請求書」以外の書類全てとなります。また、送付前に事前に以下までご連絡下さい。
2. 投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
3. 上記1、2を原則としますが、大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には、以下まで、手続きの概要、事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

美術科教育学会 本部事務局 支局

〒170-0002

豊島区巣鴨1-24-1 第2ユニオンビル4階

(株)ガリレオ 東京オフィス

担当者 後藤 恵 氏

[窓口アドレス] [g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp](mailto:g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp)

## 美術科教育学会 本部事務局

- 和歌山大学 〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学教育学部  
永守基樹 (代表理事) nagamori@center.wakayama-u.ac.jp TEL 073-457-7508  
丁子かおる (庶務・会員登録) kchoji@center.wakayama-u.ac.jp TEL 073-457-7509
- 奈良教育大学 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学教育学部  
宇田秀士 (総務担当副代表理事/本部事務局長/会費納入・会計・総務全般) udah@nara-edu.ac.jp TEL 0742-27-9223  
竹内晋平 (会費納入・会計・総務全般) shimpei@nara-edu.ac.jp TEL 0742-27-9038
- 三重大学 〒514-8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部  
上山浩 (ウェブ) ueyama@edu.mie-u.ac.jp TEL 059-231-9280
- 大阪教育大学 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1 大阪教育大学美術教育講座  
佐藤賢司 (学会通信) ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp TEL 072-978-3732  
渡邊美香 (学会通信/本部事務局運営委員) mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp TEL 072-978-3736

## 美術科教育学会 本部事務局支局

- (株) ガリレオ (www.galileo.co.jp) 東京オフィス 〒170-0002 豊島区巣鴨 1-24-1 第2ユニオンビル4階  
(担当者 後藤 恵氏)  
TEL: 03-5981-9824 FAX: 03-5981-9852  
[窓口アドレス] g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp  
担当内容 会費管理、会員管理、問い合わせ対応など

### 編集より

学会通信では、多くの会員の皆さまの情報を掲載していきたいと考えております。  
研究ノート、実践報告、文献解題、新刊紹介、国際交流、提言、イベント開催情報、その他、ご寄稿される方は、随時本部事務局(担当: 佐藤・渡邊)までお知らせください。